

自閉スペクトラム症者 Temple Grandin が見たスイフト食肉加工工場に関する2つの夢の分析

名島 潤慈

Dream analysis of Temple Grandin with autistic spectrum disorder: Two dreams regarding Swift meat packing plant

Junji NAJIMA

I はじめに

筆者は先に自閉スペクトラム症者である Temple Grandin (1947.8.29 -) (以下、G と略) の白日夢、締めつけ機と夢との関連性を吟味した (名島, 2019)。そこで取り上げたGの白日夢や夢は、10代までのGが見たものであった。

本稿では、20代前半のGが見たスイフト食肉加工工場 (Swift meatpacking plant) に関する2つの夢を吟味したい。なお、この2つの夢も含めて、Gが見た20代から30代までの4つの夢の内容は、表1にまとめておいた。表2は、Gの大学卒業後の生活史である。生活史作成の資料は、My experiences as an autistic child and review of selected literature (Grandin, 1984)、*Emergence: Labeled autistic* (Grandin & Scariano, 1986)、*Thinking in pictures* (Grandin, 1995) である。

II Temple Grandin が見たスイフト食肉加工工場に関連した夢

1. スイフト食肉加工工場の白い壁の外側に両手をあてる夢 (D1)

Gが23歳のときに見たD1の内容は、「私はスイフト食肉加工工場まで歩き、その白い壁の外側に両手をあてた。まるで、聖壇に触れているような感じがした。」というものであった。この夢を見た当時のGはアリゾナ州テンピーにあるアリゾナ州立大学の心理学の修士課程の1年生であったが、既にアリゾナ飼料場において130頭の牛を牛樋で扱った経験を有していた (D1を見る1か月前)。

スイフト食肉加工工場はカリフォルニア州・テキサス州・アリゾナ州などさまざまな所に建てられていたが、ここで言うスイフト食肉加工工場は、アリゾナ州のトルソンにあるものである。テンピーとトルソンは、アリゾナ州の州都フェニックスの右隣と左隣に位置している。D1を見たときのGはスイフト食肉加工工場の内部はまだ見たことがなかったものの、スイフト食肉加工工場の名前は知っており、強い関心を寄せていたものと思われる。

Gはそれまで牛を牛樋で扱った経験があるくらいで、屠畜の現場を見たことはなかった。しかし、スイフト食肉加工工場のそばを初めて車で通りすぎたとき、自分のライフワークが何なのかが見えるような形で具体的に浮かび上がってきたという (Grandin, 1995)。

Gの書き方は漠然としているが、食肉加工工場は文字通り生きた牛を食肉へと変換・加工する

表1 20代から30代までの Temple Grandin が見た4つの夢

番号	年月日・年齢	夢のタイトル	夢の内容	夢のなかの感情・感覚	夢についてのGの感想
D1	1971年3月10日 (23歳)	スイフト食肉加工工場の白い壁の外側に両手をあてる夢 (Grandin, 1995)	私はスイフト食肉加工工場まで歩き、その白い壁の外側に両手をあてた。まるで、聖壇に触れているような感じがした。	聖壇に触れているような感じ。	記載なし。
D2	1971年10月25日 (24歳)	スイフト食肉加工工場が巨大な博物館・図書館になる夢 (Grandin, 1995)	スイフト食肉加工工場は6階建てのビル*で、その1階部分だけが屠場になっていた。そこにあった秘密のエレベーターを見つけた私は、それで上の階に上がっていった。それぞれの階には、世界の文化が集められた美しい博物館や図書館があった。この知識の宝庫の間を歩き回りながら、人生というのは図書館のようなもので、本は1回に1冊しか読めなくて、それぞれが何か新しいものを見せてくれることに気づいた。	記載なし。	記載なし。
D3	1978年夏 (30歳)	鮮明で荒々しい夢 (複数の夢) (Grandin, 1995)	夢の内容は不明。[ジョン・ウェイン・レッド・リバー飼育場に作った薬浴槽をGが宣伝のために泳いでみせたところ、化学製品のオルガノフォスフェイト (chemical organophosphates) のために信仰に対する畏敬感 (feeling of religious awe) が消え、鮮明で荒々しい夢 (vivid and wild dreams) を見るようになった。]	記載なし。	記載なし。
D4	1981年 (34歳)	盲目になる夢 (頻回夢) (Grandin, 1995)	目が見えない。[瞼にできた癌を除去する手術を受けたが、手術後の炎症はこっぴみじんになりそうな発作をひき起こした。ある夜中に心臓が破裂しそうになって目が覚めた。そして、牛に対する執着的な思いから、自分の人生の意味はという問いに、さらに、盲目になってしまうのではないかという恐怖にまでスイッチした。そして、次の週から毎晩盲目になるという悪夢を見て、午前3時には恐怖で目を覚ました。その後、このようなパニック発作・不安発作はトフラニールによって改善した。]	恐怖。	記載なし。

*翻訳者のカニングハム久子は「60階建てのビル」としているが、原文に従って「6階建てのビル」とした。

表2 大学卒業後の Temple Grandin の生活史

年月日	事 項
1970.4.22.	ニューハンプシャー州のフランクリン・ピアース大学を卒業。心理学で学士号を取得。この日の日記には、「今日、フランクリン・ピアース大学でのすべては終わった。今こそ図書館のあの小さな扉を通り抜ける時なのだ」と書く。なお、卒論の内容は、感覚統合と締めつけ機。実験結果は、圧迫刺激が聴覚刺激許容能力を高める。卒論のタイトルは、Sensory interaction processes and the effect of pressure applied to the lateral body surfaces on auditory thresholds。
1970.	新しい締めつけ機を製作（内張りと首窓にもっとパッドを入れた）。
1970.9.	アリゾナ州テンピにあるアリゾナ州立大学の心理学の修士コースに入る。
1971.2.	アリゾナ飼料場（the Arizona feedlots）で実際に130頭の牛を牛樋で扱う。
1971.3.10.	「スイフト食肉加工工場の白壁に両手を置く夢」(D1)を見る。
1971.4.7.	日記に、「牛たちを屠場で汚染させないことが大切。せめて、何らかの威厳をもって死を迎えさせなければ」と書く。
1971.4.	D1の約1か月後、スイフト食肉加工工場を訪れ、柵の外に立って死の瞬間を待っている牛たちを見る。
1971.4.	その数日後、Gは勇気を出してスイフト食肉加工工場に行き、なかを見せてくれるように頼んだが、拒否される。
1971.5.8.	日記に、「日に日に私は牧場の方へ引っ張られていくような気がする」「心理学部のパーティでその場にそぐわない自分を感じていた」と書く。
1971.9.	修士コースの2年目に心理学から動物科学に転部する。（この頃はパートタイムで牛樋のセールスをしていて、牛の飼料場をよく訪れていた。）
1971.	自分用の締めつけ機にエアシリンダーとコントロールバルブを取り付ける（4度目の改良）。
1971.10.25.	「スイフト食肉加工工場が巨大な博物館・図書館になる夢」(D2)を見る。
1972.	Gはアリゾナ・ファーマー・ランチマン誌の発行者に接近してThe great headgate controversy という論文（さまざまなタイプの牛樋の長所と短所を論じたもの）を投稿し、採用される。以後、定期的に寄稿する（それらの論文発表が契機となってGは後にコーラル・インダストリーズで牛樋の設計に関わる仕事をする）。
1972.	やっと他人と握手したり相手の目を直視したりすることができるようになる。
1973.4.18.	テキサス州フォートワースにあるスイフト食肉加工工場に入社。その数か月後、スタナー ^{*1} を用いて初めて牛を殺したという。
1973.12.	クリスマス休暇をニューヨークの母親の家で過ごし、ひどい神経発作（nerve attack）に襲われる。
1974.9.9.	スイフト食肉加工工場の「天国への階段（stairway to heaven）」(新しい畜牛誘導路とコンベア制御システム)が完成。日記に、「天国への階段を建設してから私は急速に成熟した。なぜなら、これは私が現実に果たしたことからだ」「天国への階段の最上階で神を発見して以来、私は何らかの死後の世界があると確信するようになった」と書く。
1974.	スイフト社の飼料場で牛の体に手を当て、牛を不憫に思う。日記に、「屠畜のプロセスに参加するのを拒否することは現実否定にしかない」「動物の命の終わりは敬意をもって扱われるべき。それが私自身の存在の意味をより認識させることになる」と書く。
	[このころは、アリゾナ・ファーマー・ランチマン誌の編集者（1973年から1978年まで）と、大きな飼育場建設会社のコーラル・インダストリーズの設備デザイナー（1974年から1975年まで）とを掛け持ちで働いていた。]
1975.	アリゾナ州立大学の動物科学の修士号を取得。修士論文のタイトルは、Survey of behavioral and physical events which occur in restraining chutes for cattle。

1975.	この年、Gは自分の会社「グランディン家畜処理システム (Grandin Livestock Handling Systems)」を設立。家畜用機具デザイナーとして働く。 日記に、「天国への階段の最上段で神を発見して以来、私は何らかの死後の世界があることを確信するようになった。スウィフト食肉加工工場は、信念が確実にテストされる場所だった」と書く。
1978. 夏	アリゾナのレッドリヴァー飼育場 (ジョン・ウェインの飼育場) の牛用薬浴槽を改良する。宣伝のためレッドリヴァー飼育場に作った薬浴槽を泳ぎ、オルガノフォスフェイト (organophosphate) (有機リン剤) に触れたため、信仰に対する畏敬感が消える。そして、「鮮明で荒々しい夢 (vivid and wild dreams)」(複数の夢) (D3) を見る。
1981.5.	メモリアル・デーの日、Gはアラバマのコーシャ屠場で牛種のなかの牛を完全に鎮めながら、宇宙と一つになっている自分を感じる。完璧な静寂と平和な感覚。
1981.8.24-28.	オーストリアのウィーン、第27回ヨーロッパ食肉研究者大会で Design of animal handling systems to reduce stress を発表。ドイツ語の会話ができないために強いストレス、帯状疱疹 (shingles) を生ずる。もっとも、Gが発表した論文は特別賞を受ける。
1981.9?	この年、イリノイ大学の博士課程に入学して、博士論文の研究を行う。研究内容は、豚の置かれた環境が脳の樹状突起の成長にどのような影響を及ぼすか。
1981.11.	34歳で顔の上の皮膚癌を除去する手術を受ける。手術後の炎症がひどく、以前から続いていた不安障害が悪化。盲目になるのではないかという恐怖。抑うつ的になる。締めつけ機も効果なし。「盲目になる夢」(頻回夢) (D4) を見る。 その1週間後、抗うつ薬のトフラニール (成分名はイミプラミン塩酸塩) が不安のコントロールに効果があるという Sheehan らの1980年1月の論文 Treatment of endogenous anxiety with phobic, hysterical and hypochondriacal symptoms に依拠して、医師に、トフラニールを処方してもらう。2日も経たないうちに効果が出る。 30代前半の抗うつ薬によって、絶え間ないパニック発作が抑えられ、音に対する過敏さが緩和される。 30代前半になって初めて、不安の原因は脳内の生化学的な問題で、薬で緩和できることを知る。(それまでは、すべての不安の原因は生活の意味を理解する能力がないからだと思っていた。) 主治医に相談した上でトフラニールを飲みはじめ、1週間で不安とパニックが90%ほどなくなる。[3年後に薬を副作用の低いノルプラミン (成分名はデシプラミン塩酸塩) に切り替える。]
1982.12.17 と 12.22.	苦手な「統計学」(博士課程の必修科目) を教室ではなくて個人指導教員から教わるため、サイコロジストの Blaylock と面談して一連のテストを受ける。それらは、①ヒスキー・ネブラスカの空間推論サブテスト、②ウッドコック・ジョンソン・心理教育バッテリーのなかのサブテスト (空間関係・文章記憶・絵画語彙・反対語・同義語・数字記憶・発音ブレンド・視聴覚学習・分析総合・概念形成)、③デトロイト学習能力テストなど。
1984.	オーソモレキュラー精神医学雑誌に My experiences as an autistic child and review of related literature を発表する。この論文には、Gが1983年に描いた締めつけ機の図が載せられている。
1986.	<i>Emergence: Labelled autistic</i> を出版する。
1989.	イリノイ大学の動物科学の博士号を取得。タイトルは、Effect of rearing environment and environmental enrichment on behavior and neural development in young pigs. [Gは、地球上で永遠不滅を発見できる場所は図書館であるという、ニューヨーク市立図書館の職員の言葉を新聞で読む。この記事に激励されて博士号を取得することができたという (Grandin, 1995)。]
1990.	この年、コロラド州フォートコリンズにあるコロラド州立大学の講師になる。(1990

1990.	年以後はずっとコロラド州に住む。 食肉処理工場の動物をベルトコンベヤーで扱う「中央トラック制御システム」を開発。設計が完成した後、設計図を精肉業界の業界紙に発表する。 Gにとって嫉妬は理解しにくい対人的要素で、40代になってからやっと実態を把握して対処できるようになる。
1992. 夏	類線維腫 (fibroid tumor) のために子宮を摘出。それによって関節痛やいらいらが生じ、エストロゲン剤を服用しはじめる。
1993.8.	脳神経外科医の Oliver Sacks が G にインタビューする。

*1 翻訳者のカニングハム久子は「スタンガン (電気銃)」と訳しているが、原文に従ってスタナー (stunner) とした。

所なので、Gの言うライフワークはそれと関連したものであろう。

ところで、覚醒時のGは車でそばを通り過ぎただけであるが、夢のなかのGは歩いてスィフト食肉加工工場に近寄り、工場の白い壁の外側に両手をあてている。つまり、覚醒自己よりも夢自己のほうが対象との距離が近く、しかも、対象に触れたときには「聖なる祭壇 (the sacred altar)」に触れているような感じがしたという。これはどういうことなのか。生きた牛を食肉に加工するには当然牛を殺害しなければならないが、Gにとって牛の殺害はライフワークであり、しかもそれは何か神聖な感じのするものであったということなのか。ともあれ、「聖なる祭壇」という言葉が使われているように、夢のなかの食肉加工工場は極度に理想化されている。

しかしながら、現実の屠畜のプロセスは、牛に対して人間側が一方的に行う、血にまみれた作業である。Gがはっきりと書いていないので推測になるが、屠畜の実際の現場をまだ見ていないD1の時点ではおそらく、牛の最後をきちんと見届けるという役割、いわば、この世の牛をあの世に送り届けるという、何か神聖な役割を想定していたのではないかと思われる。

2. スィフト食肉加工工場が巨大な博物館・図書館になる夢 (D2)

Gが24歳のときに見たD2の内容は、「スィフト食肉加工工場は6階建てのビルで、その1階部分だけが屠場になっていた。そこにあった秘密のエレベーターを見つけた私は、それで上の階に上がっていった。それぞれの階には、世界の文化が集められた美しい博物館や図書館があった。この知識の宝庫の間を歩き回りながら、人生というのは図書館のようなもので、本は1回に1冊しか読めなくて、それぞれが何か新しいものを見せてくれることに気づいた。」というものである。この夢では、6階建てのビルの1階のみが屠場 (slaughterhouse) で、Gが秘密のエレベーターを見つけて上の階に行くと、残りの5つの階は世界の文化が集められた美しい博物館や図書館となっていた。屠場はいわゆる屠殺場のことなので、ここでは牛が殺害される場所を意味している。

この夢では、現に生きているものが殺害されるという生々しい場所と、世界中の文化と知識のエッセンスが集められた美しい宝庫とが対比的になっている。しかも、「屠場」と「美しい宝庫」は同一の建物内にあり、エレベーターで連結されている。Gは最初1階の屠場において、それから上の階に上がっていく。野生と未開から文化と美へと身移していく。

ところで、GはD2を紹介した後、精神科医の Raymond Moody が臨死体験者たちに行ったインタビュー集である *Life after life* (1975年出版) のことを持ち出してくる。GはD2を見た後何年もしてからその本を読んだとのことで、本のなかでは数人が臨死体験中に至高の知識を内蔵する書物の宝庫を見たと言っているという。

それからGは一転して、D2を見る数日前にあったエピソードを物語る。D2を見る2、3日前にGはアラビア馬 (アラブ種の馬) (Arabian horse) の厩舎を訪問し、そこで美しい種付け用雄

馬たち (beautiful stallions) を撫でながら、この馬たちをけっして飼料場や屠場に回してはならないとの思いを抱く。

そしてその翌日、G は今度は飼料場で牛の烙印づけやワクチン注射をするために牛樋を操作していたが、それぞれの去勢された雄牛 (steer) を見るとどれも種付け用雄馬と同じように個性的に見え、そこで「この牛たちを殺すことをいったいどうやって正当化できるのか」という大いなる疑問 (big question) に突き当たったという。

Raymond Moody の本を読んだのは少なくとも D2 の 4 年以上も後のことであっていわば後付けの連想なのであるが、その本に出てくる「至高の知識を内蔵する書物の宝庫」は、D2 の博物館・図書館と通底している。

「至高の知識」や「文化」を強調するこの連想に比べると、次のアラビア馬と雄牛の連想はより人間的な苦悩に満ちたものであろう。いくら飼料場で牛樋を操作して牛の気持ちを落ち着かせても、飼料場で飼われている牛たちは、最終的には食肉加工工場のなかで殺害されて食肉と化してしまう。その場合、牛たちが無個性の動物であればあまり煩いはないであろうが、G のようにそれぞれの牛の「個別性」(individuality) を感じ取れば、次から次へと牛を殺すことに疑問が湧いてこよう。しかし、G はこの疑問をつきつめず、46 歳のころには「共生性」(symbiosis) という考え方を提示してくる (Grandin, 1995)。

この共生性を基盤とする関係性が共生的関係なのであるが、これは G によれば、異なる種類の動物間の「互惠的關係 (a mutually beneficial relationship)」である。つまり、人間は牛や豚に餌をやり、住まいを与え、繁殖させ、そのお返しに動物たちは人間に食べ物や衣類を提供してくれる。このように両者は互惠的な関係にあるので、人間としては動物たちにきちんとした生活環境と痛みのない死を与える義務があるということになる。もっとも、ここでの共生性は屠畜と食肉を前提としており、良い餌や良い住まいと自分の個別性とを牛たちが自主的に交換するとは思えない。

共生性は、G が自己納得するための概念装置のような感じがする。例えば猟師が猟犬を育て、猟犬はその代わりに猟場で獲物を狩るといった文字通りの互惠的な関係が G の共生性にはうかがえないからである。逆に言えば、「共生性」といった概念を案出しなければならないほど G の苦衷は深いと言えよう。

3. 屠畜について

表 2 に記したように、時間的な経過から見ると、G が D1 を見たのは 1971 年 3 月 10 日であり、その約 1 か月後にスイフト食肉加工工場のなかを見せてほしいと工場側に申し込むが拒否される。その後、1971 年 9 月、修士コースの 2 年目に心理学から動物科学に転部し (このころはパートタイムで牛樋のセールスなどをしていた)、1971 年 10 月 25 日に D2 「スイフト食肉加工工場が巨大な図書館になる夢」(Grandin, 1995) を見る。そして、1973 年 4 月 18 日にはテキサス州フォートワースにあるスイフト食肉加工工場に入社し、その数か月後に、G は「スタナー」(stunner) を用いて初めて牛を殺したという。

この「牛の殺害」の一件は G の心性を推測するさいに重要だと思われるので、少し詳しく見ていきたい。牛の殺害は、*Thinking in pictures* では 2 か所で述べられている。まず、原著の 177 ページでは以下のように書かれている。

“The law requires that animals are rendered insensible to pain by either captive bolt stunning, electrical stunning, or CO₂ gas. Captive bolt kills the animal instantly by driving a steel bolt into the brain. It has the same effect as a gun. Electrical stunning causes

instantaneous unconsciousness by passing a high-amperage electrical current through the brain. It works the same way as electroconvulsive shock treatment in people. If the procedure is done correctly the animal becomes instantly unconscious.”（第1行目の“The law”とはアメリカ合衆国が1958年に定めたHumane Slaughter Actである。）

この英文の翻訳は、(翻訳者のカニングハム久子によれば)「この法律では、屠畜の際、動物が苦しまないように、係留ボルトか、スタンガン（電気銃）か、炭酸ガスで感覚を奪うことを義務づけている。脳に打ち込まれる鋼鉄の係留ボルトは瞬時に命を絶ち、銃弾と同じ効果がある」云々となっている。

次は原著の229ページで、以下。

“Several months later, Lee Bell, the gentle man who maintained the stunners, asked me if I had never stunned cattle—that is, killing them. After I told him I never had, he suggested that it was now time to do it. The first time I operated the equipment, it was sort of like being in a dream.”

この部分のカニングハム久子による翻訳文は、「スタンガン（電気銃）を扱っていた紳士的なリー・ベルが、スタンガンを使ったことがあるかと私に聞いた。つまり、牛を殺したことがあるかということだ。ないと答えると、では、やる時期が来ているとその操作を勧めた」云々となっている。

ここでは、翻訳文においてもGの原文においても、2つの問題点がうかがえよう。

まず、stunnerとは文字通り、気絶させるものである。そして、牛を気絶させる(stun)場合には、電気やキャプティブボルト（係留ボルト）が使われる。ただし、Gの最初の著作である*Emergence: Labeled autistic*には、“The cattle just walked up the ramp, and bang! It was all over. Each animal was killed instantly with a device called a captive bolt stunner. This device drives a retractable bolt deep into the animal’s brain and causes considerably less pain than the cattle suffers getting banged around in the cattle chute by rough cowboys during branding and vaccination.”と書かれている。「バーン!」という大きな音がしているので、Gが使ったスタナーは翻訳文にある電気銃（電気式スタナー electric stunner）ではなくて、火薬を使って家畜の頭部にキャプティブボルトを打ち込むという、旧式のキャプティブボルトスタナーである。[これはいわゆる家畜銃であるが、英語圏では、captive bolt stunner、captive bolt pistol、captive bolt stunning gun、cattle gun、bolt gunなどと呼ばれている。ちなみに、最初は火薬が使われていたが、しばらくすると火薬の代わりに圧縮空気を使うpneumatic stunner、pneumatic bolt stunnerが用いられるようになってきた。例えば、脳神経外科医のOliver Sacksは1993年8月にGと面談しているが、その時のSacksの記述にはa bolt shot by compressed air（圧縮空気によって撃ち出された太矢）とある(Sacks, 1995)。]

もう1つの問題は、Gの*Thinking in pictures*でも*Emergence: Labeled autistic*でも、Gがスタナーを用いて牛を殺害するという書き方をしていることである。しかし、スタナーはあくまでも牛を気絶（失神）させるものである。牛が気絶している間に、つまり牛が意識を失って動くことができない間に、屠畜場の作業員は牛の頸動脈を素早く切って放血させ、その結果として牛は死亡する（失血死する）。もしもスタナーによって瞬時に牛が死ぬとしたら牛の体内で血流は止まり、筋肉には血斑（blood clots）ができたりして、肉の質と新鮮さが保持できなくなろう。牛を気絶させることと牛を殺すこととはイコールではない。その意味では、Gの書き方は曖昧であ

る。

[Gの行為と牛の死との関連をより正確に言えば、Gがまずスタナーによって牛の意識を失わせ、それに続いて、Gとは別の作業員が牛の頸動脈を切って放血する。放血中も心臓は動いて放血を促し、やがて牛は失血死するに至る。この場合、牛の意識喪失と失血死とはひとつながりのセットなので、Gがスタナーによって牛の意識を失わせたことは広義に言えば牛を殺害したことになるかもしれない。しかし、狭義に言えば、Gの行為は牛の殺害の前段階である。そうであるのに、Gが書いた文章では、stun=kill となってしまう。ここでは、実質的な殺害部分は省略されている。]

ちなみに、Gの最近の論文を見ると (Grandin, 2014)、“There has been some questions about whether or not a captive bolt actually kills an animal. Practical experience in slaughter plants indicates that cattle shot correctly with a penetrating captive bolt have irreversible damage to their brain and they will not revive. If a non-penetrating captive bolt is used the animal may revive unless it is bled promptly.”と書かれている。訳すと、「キャプティブボルトが実際に動物を殺すかどうかについてはこれまで疑問が出されてきた。屠畜プラントでの実際経験によれば、正確に貫入式キャプティブボルトで撃たれた牛は脳に不可逆的なダメージを負い、意識を回復しないだろう。非貫入式キャプティブボルトが使われた場合、その動物は、すばやい放血がなされなければ意識を回復するかもしれない」云々と書かれている。

先端部が尖っている貫入式キャプティブボルトが牛の額に打ち込まれると、額には穴があくし、キャプティブボルトの先端が直接大脳や小脳を損傷する。一方、先端部がマッシュルーム型になっている非貫入式キャプティブボルトは牛の額に打ち当たって脳震盪を引き起こす。どちらの場合でも牛の意識は失われ、それに続く頸動脈の切断によって牛は気づかないまま死亡する。しかし、心臓がいつ止まるかについては明確な記載がない。

ともあれ、Gが書いた文章には、屠畜の具体的な情景やプロセスが記されていない。屠畜を手続き的に言えば、①牛はスタナーによって気絶させられて横倒しになる→②それから牛は頸動脈を切られ、体中の血を放血される（横倒しになったままの姿勢で切られる場合と、片脚を鎖で吊り上げられ逆さづりになった姿勢で喉を切られる場合の2つがある）→③皮を剥がれる→④頭部を切断され内臓を摘出されて枝肉となる、ということになる。もともと、中には途中で意識を回復して、もがき苦しむ牛も出てこよう（失血死するまでの短い間ではあるが）。

Ⅲ Temple Grandin の職業同一性

Thinking in pictures における D2 のタイトル部分は、“dream of the Swift plant turning into a vast library”である。ただし、いくらスウィフト食肉加工工場が巨大な図書館になったと言っても、そのすべてが図書館になったわけではない。夢のなかの図書館（博物館も含む）は6階のうちの5階分のみで、建物が一番下の1階は屠場なのである。逆に言えば、流血と死の場所の上に文化の粋がいくつも積み重なっているという大変奇妙な構造になっている。D1の「聖なる祭壇」に比べると、このD2は奇妙である。何か、GがD2を見る前に抱いた「大いなる疑問」が未解決のまま推移している感じである。

これは推測になるが、Gはおそらく「大いなる疑問」に対してきちんとした解答を見出せないまま、より有効な家畜処理機具の考案に向けて努力を重ねていったのではないかと思える。（*Thinking in pictures* には、Gが牛を初めて殺した日の夜、自分が実際に殺したことを頭から追い出し、その代わりに次の2週間、牛が工場ですできるだけ傷つかないように、簡単な改良を提案していったとある。）

生活史的に言えば、Gの職業同一性が確立されたのは、1974年から1975年あたりである。

1974年にはスイフト食肉加工工場の「天国の階段」、つまりGが設計した新しい畜牛誘導路とコンベア制御システムが完成し(27歳)、翌年の1975年には修士課程を修了して、G自身の会社「グランディン家畜処理システムズ」を設立している。それ以後GはG自身の「画像で考えるという技能」(visual thinking skills)を駆使しながら、世界でも数少ない家畜扱い機具設計士として、家畜の扱いを改善するさまざまなシステムの案出に取り組んでいった。Gが38歳のときに出版した*Emergence: Labeled autistic*には、「私は成功した家畜扱い機具設計士である」(I am a successful livestock handling equipment designer.)という一文が見られる。

総体的に見ると、Gがアリゾナ州立大学大学院の修士課程にいたときにやっていた牛樋操作人(cattle chute operator, squeeze chute operator)や牛樋販売人(cattle chute salesperson)はあくまでもパートタイムの仕事であり、Gの本領はやはり、牛たちを怯えさせない人道的・博愛的な装置の開発にあった。

IV おわりに

Gは最初「天国への階段」(新しい畜牛誘導路とコンベア制御システム)、後には「中央トラック制御システム」など、可能な限り牛の恐怖や不安、死ぬさいの痛みなどをなくするような工夫を行ってきているが(表2を参照)、その背景の1つには、牛を殺しつづけていくこと、より正確に言えば牛の殺害に手を貸しつづけていくことの罪滅ぼしという側面もあったのではないかと推測される。

もう1つはこのことと関係するが、Gは牛に同一化して牛の目でその環境を見ることのできる人である。個性ある牛たちが細切れの食肉になる運命をどうしても回避できないのであれば、牛に同一化しているGとしては、その持てる力をフルに動員して、せめて平安な環境と平穏な死を迎えさせたいと強く願ったように思える。それはGの優しさであるが、同時にグランディン家畜処理システムズを経営する経営者としての目でもあろう。Gが考案した家畜処理のシステムによって牛たちが無用なストレスにさらされないで安らかに死去すればそれは屠畜業者にとっては良い肉質の牛肉を入手できることとなり、したがってGの会社も重要視されるからである。また、他者からの良好な評価は、Gの家畜扱い機具設計士としての職業同一性を強化してくれるからである。

[付記] 本論文は、2015年5月31日に開催された日本心理臨床学会第34回春季大会ワークショップにおいて筆者が講義した「自閉症者の夢分析—ドナ・ウィリアムズとテンプル・グランディン」の一部を推敲したものである。

文献

- Grandin T (1984) My experiences as an autistic child and review of selected literature. *Journal of Orthomolecular Psychiatry*, 13(13), 144-174.
- Grandin T (1995) *Thinking in pictures : And other reports from my life with autism*. New York, NY: Doubleday. (カニングハム久子訳, 1997, 自閉症の才能開発—自閉症と天才をつなぐ環, 学習研究社)
- Grandin T (2014) Recommended captive bolt stunning techniques for cattle. <http://www.grandin.com/humane/cap.bolt.tips.html>
- Grandin T & Scariano M (1986) *Emergence: Labeled autistic*. Novato, CA: Arena Press. (カニングハム久子訳, 1994, 我, 自閉症に生まれて, 学習研究社)
- Grandin T & Johnson C (2005) *Animals in translation: Using the mysteries of autism to decode animal behavior*. New York, NY: Scribner. (中尾ゆかり訳, 2006, 動物感覚—アニマルマインドを読み解く, NHK

出版)

名島潤慈 (2019) 自閉スペクトラム症者 Temple Grandin の白日夢、締めつけ機と夢の検討 山口学芸研究, 10, 53-66.

Sacks O (1995) *An anthropologist on Mars: Seven paradoxical tales*. New York: Alfred A. Knopf. (吉田利子訳, 1997, 火星の人類学者—脳神経外科と7人の奇妙な患者, 早川書房)